真・恋姫†無双　王's

YTA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
真・恋姫†無双　王ｰ　ｓ

【Ｎコード】
Ｎ０２５７Ｒ

【作者名】
ＹＴＡ

【あらすじ】
正史の世界の地下駐車場。『剪定者』左慈は、三人の異形の鎧を着込んだ男たちに追われ、「自分達から奪った物を返せ」と迫られる。
それを拒否した左慈を、男たちの刃が貫こうとした瞬間、左慈は『銅鏡』の力で外史への扉を開いた。
左慈は外史へ向かう途中、自身の宿敵とも言える男の名を呼ぶ。
一方、外史の世界では、北郷一刀が、ひょんな事から、一枚の見

た事も無い硬貨のような物を手にしていた――――。

序章（前書き）

これを書いた日の朝、、『ソウソウ！ソンサク！リュウビ！サンゴク・サンゴク・サンゴク！』と言うソウルフルなヴォイスの夢を見まして、勢いで序章的なものを書いてみました。

序章

壱

「はぁ、はぁ、はぁ、はぁ……」

少年は、汗で芦色の髪の毛が張り付いた額を掌で拭うと、身を隠した石柱から、自分が走って来た方向を、そっと覗き見た。勿論、追跡者の気配を探る為だ。

しかし、夜の闇が染み出している様にも感じられる地下駐車場の暗がりからは、なんの気配も感じられなかった。

「撒いた――――か？」

少年はそう呟くと、ズボンのポケットから、一昔前の携帯電話にも見える物体と、それぞれ藍、赤、緑色をした、円形の硬貨の様な物を取り出した。最もその大きさは、五百円硬貨の倍近い代物である。

「まったく、于吉の奴。“新生”の直後だっていうのに、厄介な仕事を押し付けやがって……」

少年は、そうひとりごちてから、再びそれらをポケットに仕舞うと、軽く懐を撫でた。

「しかし、あれ程のものだとはな――――三枚奪えただけでも上出来か。最悪、“これ”を使うしかないな。チッ！癪に障る……」

少年が懐から手を離した瞬間、轟音と共にコンクリートの天井が崩れ落ち、瓦礫が雨の様に少年の前方に降り注いだ。慌てて走り出していたら、間違いなく直撃していたであろう。

「ふん……。随分と手間を取らせてくれたものよな――――『左慈』」
左慈と呼ばれた少年は、口元を白い服の袖で覆って埃を避けながら、濛々と立ち上る土煙の中から聞こえた声の主に、鋭い視線を投げつけた。
「五月蠅い。亡霊の成り損ないの分際で、偉そうに囀(さえず)るな、『ブテイ』！！」
左慈の言葉に答える様に、その人物は姿を現した。
藍と黒で彩られた鎧に包まれる体格は、平均的に見れば小柄な部類に入るであろうが、双眸に宿る刃の如き眼光と、全身に纏った覇気が、それを補って余りある威圧感を放っている。
「それは、貴様とて同じであろう？木偶人形よ――――。ましてその身体、今は我等と同じ理(ことわり)で顕現している様ではないか。なぁ、お前たち……」

ブテイと呼ばれた壮年の男が、軽く顔を傾げて後方にそう呼び掛けると、未だ収まらない土煙の中から、二つの影が揺らめいた。
「なっ！？ショウハ！レッショウ！……貴様ら、手を組んだのか！？」
左慈の困惑と驚愕が綯(な)い交ぜになった様な大声を聞いた二人の男は、揃って不敵な笑みを漏らした。
「当然だろ、左慈ぃ。今んトコ最大の問題は、お前が俺達から奪った『核』と、“あれ”の『伝導機』だからな」
真紅の軽具足に身を包んだ偉丈夫が、左慈を指差しながらどこか愉快そうにそう言うと、深緑の豪奢な鎧を着たもう一人の男が、言葉を継いだ。
「そう言う事だ――――左慈よ。我々が如何に不完全でも、今の貴公に勝ち目はあるまい。大人しく奪った物を返してもらおう」
「生憎、俺は捻くれ者でな――――断る！」
左慈は、まだ言葉が口から出切らぬうちに跳躍すると、斬撃にも

似た風切り音を伴った蹴りを、ブテイの横っ面に叩きつけた。しかし、次の瞬間、確かな手ごたえに僅かに口元を緩めた左慈は、驚愕して息を飲んだ。
「馬鹿な……」
「ふん。脆弱だな、左慈よ。『剪定者』の名が泣くぞ？」
ブテイは、左慈の右足の沿う様に傾げた顔から、瞳だけを左慈に向けて、面白くもなさそうにそう言った。左慈が、殺気を感じてブテイの肩を蹴って空中に舞い上がった刹那、左右から、放たれた物が、左慈の身体があった空間で、激しい金属音と共に交錯して、大きな火花を散らす。
「へぇ。逃げ足の速さは、大したモンじゃねえか」
真紅の男、ショウハが、その手に握った、煌びやかな装飾の施された拐（トンファー）を引きながらそう言って嗤うと、深緑の男、レッショウも、同じく両手に持った双剣を引いて、左慈を見る。
「確かに……。流石は、神仙の名を名乗るだけはある。しかし――――やはりまだ、本調子ではない様だな」
「チッ、言ってくれる……」
苛立った口調でそう言った左慈は、鮮血の滴り落ちる左腕を押えながら、間合いを切った。
「ほぅ。我等と同じ理で存在していながら、血を流すとはな……。これも、『殻』の成せる業か――――。まぁ、どの道、次は無い」
ブテイは、どこか考え込む様にそう言いながらショウハとレッショウの間に進み出ると、腰に佩いた、柄に美しい宝玉が埋め込まれている剣を、鞘から引き抜いた。
男たちは、ブテイの言葉が終わるのを合図に、再び左慈めがけて武器を構え、突風の様な早さで肉薄した。

それぞれの刃が左慈の胸を貫こうとし、三人の男たちが勝利を確信した瞬間、“ピシッ”という音と共に、左慈の胸から白い閃光が溢れ出して、薄い闇で覆われていた地下駐車場を激しく照らす。

男たちは、その光によって照らし出された左慈の顔に、不敵な笑みが浮かんでいるのを見て、全てを悟った。
「まさか、『剪定者』の俺自ら、外史の扉を開く事になろうとはな。だが、貴様らに正史で暴れられるよりはマシだろう」
「おのれ、木偶人形が！！」
ブテイが、ギリッと歯を軋ませて叫んだ罵りを聞いた左慈は、その端整な顔に浮かんだ、美しいとさえ言える微笑みを崩す事なく、三人の男たちを見返した。
「悔しければ、追って来るがいい。最も――――“自分と戦う覚悟があれば”だがな」
「チッ、この糞ガキ！！」
ショウハがそう叫んで、右手の拐を、光に飲み込まれようとする左慈の顔めがけて打ち込むと、左慈の顔は、まるで霧の様に引き裂かれ、その微笑みを残したまま霧散した。
「如何致しますか？ブテイ殿」
レッショウは、双剣を鞘に納めると、左慈の消失と共に残された、真っ二つになった『銅鏡』を見遣りながら、ブテイに尋ねた。
「知れた事。奴が奪い去った『核』がなければ、我等は完全には成れぬ……。奴の望み通り、追って往ってやろうではないか」
「ハッ、面白ぇ！！“こっち”での本番の前に、外史とやらで予行演習と洒落込むか！」
ブテイの言葉を聞いたショウハが、右の拳を、左の掌に“パシン”とぶつけながらそう言った。両手に握られていた筈の拐は、既に何処かに消え失せている。
ブテイが、コンクリートの上に打ち捨てられていた銅鏡に向かって右手を翳すと、銅鏡は僅かにカタカタと揺れたあと、ふわりと空中に浮かび上がった。
ショウハとレッショウも、それに倣って右手を銅鏡に翳す。
「いざ、往かん。偽りの園へ――――！！」
ブテイが厳かにそう言い放つと、空中に浮かんだ銅鏡は、空中で

ピタリと元の形にくっつき、その鏡面を別っていた“ひび”を、見る見るうちに修復して、再び先程と同じ光を放ち出した。
光が一際強くなった次の瞬間、地下駐車場は、本来の薄い闇と静寂を取り戻し、崩落したコンクリートの天井とその瓦礫が、ただ残されているのみであった――――。

弐

左慈は、多元光に溢れた空間を“飛行”しながら、ポケットから藍色の硬貨の様な物を取り出した。
「これか――――、まぁ、どの色でも構いはしないがな」
左慈はそう言って取り出した物を握り締め、その手に唇を当てて、何事かを呟いた。
「まったく、癪に障る……。しかし、前回は俺が巻き込まれたんだ。今回は貴様に巻き込まれてもらうぞ、『北郷一刀』――――!!」
藍色の硬貨は、左慈の叫びと共に放り投げられるのと同時に白い光に包まれて、多元光で出来た光の道の彼方へ飛び去っていった。

参

「ふぁ～あ。ん……寝ちゃってたのか――――」
北郷一刀は、木の板で出来た簡素な長椅子からむっくりと起き上

がると、目ヤニの付いた両目を擦って、大きく伸びをした。
久し振りの休日に趙雲こと星に連れ出され、例の『メンマ園』にやって来た一刀は、新メニュー談義で盛り上がって、そのまま試作品を作る為の材料を買いに出掛けると息巻く星と店主に、「手間賃は出すし、夕方までに戻らなかったら、屋台を閉めて帰っていいから」と言われて、無理矢理、店番を押し付けられてしまったのだった。
来たのが既に昼過ぎだった事と、そもそも一般の客が殆ど寄りつかない店である事が重なって暇を持て余した一刀は、長椅子に横になって空を見ているうちに日ごろの疲労が出てしまったのか、いつの間にか眠り込んでしまったのである。
「まぁ、久し振りにたっぷり寝れたから、良しとするか」
一刀は、折角の休日が終わりかけている事を、改めて知らしめているかの様な夕日に向かってそうひとりごちると、いそいそと屋台を閉めにかかった。
メンマ園の屋台は、車輪が付いていて移動可能な、いわばワゴンの様なタイプなので、全てを屋台に収納できる造りになっているのである。

一刀が、持ち運べるように作られた竈(かまど)や皿洗い用の桶などを片づけ、自分の眠っていた長椅子をカウンターに乗せようとして持ち上げると、カウンターの上に、見覚えの無い物が置いてある。
「ん？こんなの、寝る前には無かったよな……？」
一刀はそう呟いて、長椅子を一旦下ろしてから、それを手に取ってみた。一見した所、金色で縁取られた大きな硬貨の様に見えるそれには、なにやら文字らしきものが刻まれていた。
「うん？『曹』……？あ、裏にも何か……『操』って、これ、華琳の事か？でも、こんなの作ってるなんて聞いた事ないし、新しい通貨にしちゃ豪華過ぎるよな———」
一刀は首を傾げると、改めて手に取ったその物体を、入念に観察

した。
やはり、新しい通貨などではない事は、すぐに確信出来た。紫がかった藍色などという硬貨は聞いた事がないし、装飾は豪奢で、分厚過ぎる。確かに華琳の派手好きで有名だが、こんな物を流通させようとしたら、コストが掛かり過ぎて国が傾いてしまうだろう。
そもそも、貨幣統一案が実行されている今、魏のみで流通可能な新通貨を作るような事を、華琳が無断でするとも思えない。
「それに、ラーメン一杯“五十曹操”とかシュール過ぎるだろ、流石に……。あ！もしかして、記念硬貨的な物とか？」
そう口に出してしまうと、一刀は何となく自分の考えが正しいように思えてきた。この世界に記念硬貨の概念があるのかは知らないが、いつかの戦に勝った折、記念に華琳が士気を上げる為に作らせた記章（メダル）の様な物なのかも知れない。

「でも、何で俺が寝てる間に？星かなぁ……」
もしも自分が寝ている間に客が来たのだとすれば起こされる筈だし、第一、料理も出していないのに代金を置いては行かないだろう。しかも、貨幣かどうかも定かではない硬貨などは。
となれば、まだ当分掛かる事を伝えに来た星が、寝ている自分を起こすのを躊躇して、例の“手間賃”代わりに、自分の集めている怪しげなコレクションの内の一つを置いて行った、と考えるのが、一番的を得ている気がした。

星は、ああ見えて義理堅い所があるから、自分の主への礼に直接金銭を渡すのを憚（はばか）って、それに代わる品物を置いて行ったのではないだろうか、と一刀は思ったのだ。
「それにこの前、華琳の所に通い過ぎだって、皮肉言われたばっかりだしな……」
礼の品にまで皮肉を込めるというのは、いかにも星のやりそうな事ではある。

「まぁ、あとで星と店主さんに聞いてみて、違ったんなら警備隊で預かれば良いか」
一刀はそう呟くと、藍色の硬貨（のような物）をポケットにねじ込んで片づけを済ませ、渡されていた予備の鍵で屋台と、屋台と壁の突起を繋ぐ鎖に鍵を掛け、暮れなずむ街を背に、城への帰路に着いた。
この時、彼はまだ、自分のポケットの中にある物が、巨大な騒乱を引き起こす火種となる事を、知る由もなかった――――。

第一話　種馬とメダルと謎の仙人　前編（前書き）

ＴＩＮＡＭＩ、当サイト共に、連載希望のコメントを頂いたので、正式に連載する事にしました。

しかしこの場合、原作名は恋姫とライダー、どちらにすべきなのか……。

尚、連載に伴い、短編として投稿した『序章？』は、三日程で削除し、連載物として再投稿させて頂きますので、予めご了承ください。

評価、感想など頂けると大変励みになりますので、お気軽にお願いします！

では、どうぞ！！

第一話　種馬とメダルと謎の仙人　前編

壱

「何、それ？」
北郷一刀が差し出した藍色の硬貨のような物を見た、曹操こと華琳の反応は、そんなそっけない一言だった。
「いや、何って言われても……。これ、華琳が作らせた物じゃないのか？」
「はぁ？何で私が？」
「だって、華琳の名前が彫ってあるから、俺はてっきり、前に華琳が戦勝記念か何かで作らせたもんだと思ったんだけど……」
一刀は、『メンマ園』で件（くだん）の奇妙な藍色の硬貨を見つけた後、偶然にも曹魏の諸将が政務に勤しむ館を訪ねる用事が出来た為、折角だから直接本人に聞いてみようと、華琳に奇妙な拾い物を見せてみたのだった。
「私の名が？ちょっと近くで見せてくれるかしら？」
華琳はそう言って、夏侯惇こと春蘭、夏侯淵こと秋蘭の二人が両側に侍る玉座に、一刀を誘（いざな）った。本来であれば、数十段の緩やかな階段の上に鎮座する華琳に近づく事を許される男など、皆無である。一刀はこの階段を昇る時いつも、自分が華琳にとって“特別”なのだと、強い優越感を感じずにはいられない。閨で、彼女の美しい黄金色の髪を手櫛で梳（す）いている時と同様に。
「これなんだけど――――」
一刀は、不意に湧きあがって来た思考の波のうねりを悟られない

様に注意しながら、華琳の手に藍色の硬貨を渡した。華琳は、「ふむ」と小さく呟いて、一刀の手から硬貨を受け取ると、しなやかな指でそれを弄びながら、軽く眉間に皺をよせて眺める。その左右から、春蘭と秋蘭も興味深げに華琳の手にある物を覗き込んだ。
「確かに、私の名のようね……。一刀、あなたはこれを、屋台で拾ったのね？」
華琳は、硬貨から片時も視線を逸らす事なく、一刀にそう尋ねた。一刀が頷くと、春蘭が満面の笑みを浮かべて豪快に笑う。

「これはきっと、華琳様の偉大さを知った民草が、華琳様を讃える為に作った物に違いありません！うむ、実に天晴れな心がけだな！」
「姉者……。華琳様の耳元で、そう大声を出すものではないぞ――――申し訳ありません、華琳様。姉者が粗相を……華琳様？」
秋蘭に声を掛けられた華琳は返事もせず、手に持った硬貨を魅入られた様に見詰めるばかりで、何の反応もしようとしない。それどころか、先程の春蘭の大声も届いていないようで、表情すら変わらない。
一刀、春蘭、秋蘭の三人は、顔を合わせて訝しそうに首を傾げ、再び華琳を見た。華琳の深い碧を湛えた美しい瞳は、相変わらず藍色の硬貨に注がれるばかりで、何の感情も読み取れなかった。
「おい、華琳？」
意を決した一刀が、恐る恐る華琳の細い肩を掴んでそう呼び掛けると、華琳の瞳にゆっくりと光が戻り、不思議そうに三人の顔を見回した。
「あら、一刀。どうしたの？そんな変な顔をして――――春蘭、秋蘭も」
「いえ……」
「何でもありません、華琳様」
春蘭と秋蘭は、双子ならではのコンビネーションで、まるで一人の人物が答えた様にそう言った。

「そう？兎も角、これは私が作らせた物ではないし、魏の本国で作られた物でもないわね。第一、私の名を表裏で“二つに割る”なんて、不遜も甚だしいわ。……まぁ、意匠の趣味は認めてあげても良いけれど」
「お前はどこの家康だよ……。でも、そうか。知らないなら、それはそれで良いんだ」
一刀は、華琳の手から記章を受け取ると、ポケットにそれを放り込んだ。
そう、記章（メダル）。
記念硬貨でもないと言うのであれば、これが『硬貨』でない事は確実だ。それならば、やはり記章と言うのが最も適しているだろう。
「なら、そろそろ政務に移りたいのだけれど？午後のお茶の時間までには終わらせたいの」
「あぁ、そうだね」
一刀は華琳の言葉に頷いて、差し出された右手を取り、華琳が席を立つのを手伝った。
「お茶のあと、今日は春蘭と秋蘭が、貴方に騎馬隊の編成についての相談があるそうだし。そうよね、秋蘭？」
一刀が、華琳の視線を追って二人の顔を見て、「そうなの？」と尋ねると、秋蘭が僅かに頬を赤らめて答えた。
「いや、まぁ、なんだ。まだ具体的な話ではないので、軍儀で議題にするのはどうかと思って、だな。その……」

「ええい！北郷、全部貴様が悪いのだ！！」
いつもは、尋ねられればさらりと答える秋蘭が珍しく口籠っていると、横にいた春蘭が、顔を真っ赤にして怒鳴った。
「はぁ！？なんでそうなるんだよ！話の脈絡が全然合ってないだろ！！」
一刀が、いつもの如くな春蘭節に抗議の声を上げると、春蘭も負けじと怒鳴り返す。

「やかましい！そもそも貴様が私達をもっと構っていれば、こんな面倒臭い事は言っておらんわ！！」
「……」
「……」
「……」
「あれ……？」
春蘭は、言いたい事を言ってしまうと、三者三様に項垂れている一刀、華琳、秋蘭の顔を見回して、不思議そうに首を傾げた。
「どうなされたのです、華琳様？そんな御顔をなされて――――秋蘭？」
「姉者……。そんな事を言っては、折角、華琳様が考えて下さった策が台無しではないか……」
「あ」
沈黙に耐えられなくなった一刀は、ポカンと口を開けて呆ける春蘭の肩にそっと手を置いた。
「その、ゴメンな、春蘭。俺、二人がそんなに俺を待っててくれたなんて思わなくて――――」
「う、う、うわあああああぁぁぁぁぁぁん！！」
春蘭は、一刀の言葉が終わる前に、室内なのに何故か砂埃を巻き上げて、泣き声を残して猛然と走り去ってしまった。
「あぁ、恥ずかしさの余りに泣いて逃げ出す出す姉者も可愛いなぁ……」
「しゅ、秋蘭……？」
一刀がおずおずと声を掛けると、春蘭が走り去った方を恍惚の表情で眺めていた秋蘭は、ハッと我に返って一刀に顔を向けた。
「いやまぁ、今、見た通りの訳だ。北郷。その、姉者がな、最近お前がこの屋敷に来る時は、いつも華琳様の閨に泊まっているものだから、それを少々気に病んでいてな。私は、『それならば直接お前に我等の部屋に来てくれるよう言おう』と提案したのだが、それは恥ずかしいと……」

一刀は、苦笑いを浮かべて頷きながら、秋蘭の言わんとしている言葉を継いだ。
「だから、華琳に適当な建前を考えて協力してもらった、と」
「うむ。私としても、お前に構って欲しかったのは同じだったからな。少々、手が込み過ぎかとも思ったのだが……」
華琳は、そう言って恥ずかしそうに頬を掻く秋蘭を愛おしげに眺めて、悪戯っぽく一刀に笑いかけた。
「だ、そうよ、一刀？嬉しいでしょう？」
「そりゃ、まぁ……嬉しいけどさ」
一刀は、頭をボリボリと掻きながら、呟く様に答えた。
魏の将達、特に華琳、春蘭、秋蘭の三人は、一刀に対して正面切って好意をぶつけてくれる事は殆どない。だから、たまにこう言う事を言われると、何度も愛を交わした今でも、未だに気恥しくなってしまうのである。
華琳は、不敵な笑みを浮かべて一刀を見遣ると、口調を少し真面目なものに変えた。
「では、成すべき事をさっさと片付けてしまいましょうか。やる事は山積みなのですからね」
「それは、良いけど、華琳」
「なにかしら？」
「春蘭、放っといていいのか？」
「心配はいらんさ、北郷」
一刀の問いに華琳が答える前に、秋蘭が口を開いた。
「今日の仕事は、内政に関する案件が殆どだからな。姉者が居なくとも、どうとでもなる」
「秋蘭、お前、ホントたまに酷いよな……」
秋蘭は、一刀の問いには答えずに僅かに微笑むと、二人に先立って階段を下り始めたのだった――――。

弐

はぁ……」

武芸者風の女は、道沿いに席を出している茶店で、冷めきってしまった茶を一息に飲み干すと、再び深い溜め息を吐いた。

女の名は、李梅。

少々武芸の心得があるだけの、何の変哲もない女である。彼女は今回、久々に募集された新兵募集の高札を見て、故郷の村から遥々都に上って来た、所謂『お上りさん』であった。

彼女はかつて、『黒髪の山賊狩り』として名を馳せていた時代の関羽こと愛紗に故郷を救われて以来、その雄姿に憧れて、女だてらに武芸を習い、武官の道を志してきた。それ故に彼女が学んだも、憧れの関羽将軍と同じく、扱いが難しいとされる偃月刀だ。

しかし、彼女の父は頑なに娘の仕官を許さず、いつしか故郷も魏領となっていたこともあって、李梅の夢は、夢のままで宙ぶらりんの状態だった。

＞pf＜

その後、漸く長い乱世が終わり、三国間の国交が再開されたのは良かったものの、泰平の世となった事による軍備の見直しと、それに伴う縮小によって、かつてのように、腕に多少の覚えさえあればすぐに新兵として取り立ててもらえる時代でもなくなってしまった。

今回の募集も、大凡（おおよそ）半年振りのものだったのである。それも、関羽将軍を擁する蜀軍からの。それなのに———。

「どうしよう……」

李梅は、かの美髪公が振るうそれとは比べ物にもならない安物の偃月刀の柄を力なく握って、そうひとりごちた。
「申し訳ありませんが、正午の銅鑼が鳴って以降にいらっしゃった方は受付けかねます」
息を切らせて走って来た李梅を前にした係の兵士は、心底すまなそうにそう言って、受付所の片付けを始めてしまったのである。
―――田舎から家出同然で出て来たのだ。もう路銀も殆ど無いし、どうにかしてくれ―――李梅はそう言って食い下がったのだが、「貴方と同じ境遇で来られた方は沢山います。それなのに、私が貴方の応募を認めたとして、もし貴方が受かってしまったら、きちんと規定を守って落ちた人達はどう思いますか？」と、言い返されてしまった。
兵士の言葉は至極正論である。自分だって、そんな奴がいたら、贔屓だと、認めたくないと思うだろう。しかし李梅にしても、家出同然で村を出て来た事も、路銀が殆ど残って居ない事も本当だった。
行く当てなど無いし、警備隊制度が確立している今では、李梅程度の腕の用心棒を雇ってくれる所など皆無だろう。今飲み干した茶だって、おかわりする余裕も無い。
李梅は、またもや深い溜め息を吐くと、鉄火な口調で見事に客を捌いている女将に、代金を座っていた長椅子に置いておく旨を告げて、席を立った。
「（一人になりたい……）」
李梅は唐突にそう感じて、大通りから余り人気のなさそうな脇道に入った。どうせ道順など解りはしないし、目的地など無いのだから、どの道を歩いても大差などありはしない。
「（やっぱり私じゃ、関羽将軍みたいにはなれないのかな……）」
李梅が、鬱々としながらそんな事を考えていると、どこからか、優しげな男の声が響いた。
「貴方―――中々良い“欲望”をお持ちですね」
「えっ！？」

李梅は思わず周囲を見渡したが、それらしき人物など何処にも居ない。李梅が、結局空耳だろうと再び視線を戻すと、眼の前に、端整な顔立ちの男が立っていた。それも、口付け出来る程近くに。

参

「誰！！？」

男は、飛び退いて偃月刀を構える李梅に微笑みながら、こちらには敵意は無いとでも言うように両手を上げた。

「驚かせてしまいましたか？それは申し訳ない事をした。そんなつもりはなかったのです。どうぞお許し下さい」

「あ、いえ、こちらこそ……！！」

李梅は内心、思わずそう言って偃月刀を降ろした自分を訝しんだ。確かに、襲おうと思えばいつでも襲えた自分を、男は襲わなかった。美しい装飾の施された鎧や、腰の左右に差した双剣からも、男が金に困った強盗には見えない。

それに、強姦魔の類なら、金物（かなもの）を持った女を獲物に選んだりしないだろう。そもそも、強姦魔が獲物に前以て声を掛けたりするとも思えない。だが、李梅の警戒を解いたのは、それら理詰めの思考ではなかった。

李梅の警戒を一瞬で解いたもの。それは、男の笑顔だった。見た瞬間、何となしに笑い返してしまう。そんな笑顔。

「どうなさいました、お嬢さん？そんな憂鬱な顔をなされて。おっと、申し遅れました。私は烈昭と申します。以後、お見知り置きを」

李梅は、曖昧な笑顔を返して自分名を名乗った。

「李梅さん。良い御名前ですね――――それで、どうして貴方は、そ

んな沈んだ顔をなさっているのですか？」
李梅は、事のあらましを、烈昭と名乗る男に話した。赤の他人に、どうしとこんな事を話しているのか？李梅は心の中で、そう自分に問い掛けたが、答えなど分かり切っていた。誰かに、聞いて欲しかったのだ。自分の不安を、悩みを、悔しさを。
李梅は、粗方の事を話し終えると「これじゃあ、関羽将軍みたいなるなんて、夢のまた夢ですね」と言って、話を締め括った。
「素晴らしい！」
そう言った男の顔を、李梅は唖然として見つめた。烈昭は、そんな李梅の肩を抱くと、更に喋り続ける。
「そんな欲望を持つあなたとこの私が巡り合えたのは、正しく奇跡ですよ！宜しい！あなたの欲望、私が叶えて差し上げましょう！」
烈昭がそう言い終わると、不意に李梅の身体に力が入らなくなった。
「怖がる事はありませんよ――――お嬢さん。“これ”で、あなたの欲望は叶います。しかも、“これ”は、私のとっておきなんですから……」
李梅は、烈昭が優しげに語りかけながら自分の頭に深い緑色の何かを“入れる”のを、魅入られた様に見ていた。
李梅の身体に自由が戻るのと、腹の中から全身に包帯を巻き付けた様な異形の怪物が這い出て来たのは、ほぼ同時であった。
「何も心配いりませんよ……お嬢さん」
混乱と恐怖で思考の停止した李梅は、尚も優しげな烈昭の声を聞きながら、ゆっくりと意識を手放した――――。

第一話　種馬とメダルと謎の仙人　前編（後書き）

今回のお話、如何でしたか？
先日、デムパの啓示を受けて書いた序章を投稿したところ、読者さんから連載して欲しいと言う有り難い御言葉を頂きましたので、今作を投稿する運びとなりました。
改めて、ありがとうございます。

今回、連載中の『皇龍剣風譚』では、まだ書けていない魏の三人を書いていて、「あぁ、やっぱりみんな可愛いなぁ」と改めて感じましたｗｗｗ

さて、この『王，ｓ』なのですが、現在ネタ元の作品が進行中と言う事もあり、剣風譚より少し進めるのが遅くなるかも知れません。
なにせ、本家さんのストーリー展開によって、今後登場させる予定のキャラの役割が、ガラリと変わってしまうかもしれませんので、御了承頂ければと思います。

では、また次回、お会いしましょう！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0257r/

真・恋姫†無双　王's

2011年2月28日14時55分発行